

## 「宗教を考える」ための出発点

柴田 有

今日は宗教について話をさせていただくわけですが、最初に前置きとして申し上げますと、宗教家のように教えを語るつもりは全くありません。また、宗教関係の信者さんとか、信心のある人の立場で体験談をしたり、信仰の証言をするつもりも全然ございません。むしろ、宗教の外部に身を置いた人間の立場で、外部から宗教にアプローチしてみたい。言い換えますと、誰でもが理解できる言葉でどこまで宗教を語り得るか、その限界まで努力を傾けてみたいということです。そう覚悟を決めますと、すぐに批判を浴びそうだなという不安な面も出てまいります。よく言われることなのですが「あんたね、宗教というものは信仰を持ってみなければ分かるもんじゃないですよ」と言われてしまうんですね。「どんなにあんたが理屈をこねたって本当のところは頭で分かるものではないんですよ」、そういう声が聞こえてくるような気がいたします。それは確かにそうかもしれません。しかし、そうであるにしても宗教の外部から宗教を考えることは決して無駄ではない、というのが今日の私の考えであります。なぜかと申しますと、外部から宗教を考えることは宗教の真髄というようなものには達し得ないとしても、宗教とその外にいる人間との関わりについて、何らかを学ぶ機会になるのではないかと思うからです。

### 出発点の模索

本日の私の話は表題の通り、出発点を模索する、出発点を探してあれこれ考えてみるということです。もう亡くなりましたが20世紀フランスの哲学者にアランという人がいるのをご存じでしょうか。ひと頃、日本でも大変紹介され、研究

されまして、フランスでは現代でもアラン学会というのが積極的に活動しております。この人はプラトン、デカルト、スピノザ、カントなどの哲学研究で著作や論文を書きましたけれども、日本では『幸福論』という本でとくによく知られていると思います。

この人は生涯大学の先生ではありませんでした。ご承知かもしれませんが、ヨーロッパでは高校で哲学の授業がありまして、アラン先生もリセで大変優れたお弟子さん達を育てた人です。たとえば、シモーヌ・ヴェイユは、このアランさんの弟子です。アランさんに、こういう話が残っています。リセで自分の生徒たちにしばしば、論文やレポートを書かせました。そのときアラン先生は論文やレポートをどう評価したか。アラン先生は非常に簡単にしか論評を述べなかった。学生を前において、たとえばこういうふうに言ったということです。「あなたは勇気が足りませんね」。それだけなんです。それからよくアラン先生の評価で出てくる言葉に「あなたはまだ始まっていませんね」というのがあります。前の夜徹夜でやっと50頁書き上げ、やれやれこれで終わったかと思っていると、「あなたはまだ始まっていませんね」。出発点を見つけるというのは難しいことなんです。出発点を見つけるということは、きっと勇気のいることだと思います。そこから自分が出発するんだ、というふうに心を決めるのは勇気がいることだと思うのですけれど、こんな短い言葉だけで「じゃあ、これから頑張る」と言って、論文やレポートを返していたようです。我々の研究とか思索において、出発点の持つ意味を深く教えてくれる言葉であろうかと思えます

どうして出発点が大事かと申しますと、出発点をどう選ぶかによって物事を考える思考の軌跡が

決まってくる、思考のシュプールが決まってくる、ということがあるからです。山登りにたとえますと、登山のルートはどの登山口を選ぶかによって、ほぼ道筋が決まってまいります。勝手な入口から、勝手なルートで山を登るなどということは、想像の上では出来ても、実際に山に入ってみれば、それがどんなに命知らずの行為になるかすぐ分かるのです。似たような事情は登山に限りませんで、たとえば将棋とか囲碁なんかも考えてみますと、最初にどういう布陣を作るか、どこから始まるかによって戦いの展開、また戦いの結果が大きく左右される。こういう理路と申しますか、理屈の道筋というものが決まっておりますために、我々はそう勝手な出発が出来ないという事情があります。そのために出発点を探すのがなかなか大変な仕事だし、また決めても勇気を要するのだと思います。

最初に申しましたように出発点、あるいはアプローチを探すことが今日の課題なのですけれども、それを決めますと宗教とは何かを考察する理路、ルートの基本線が定まってきます。宗教とは何かという問いに対して、ある出発をすればそれ相応の到達点に至る。別の出発をすれば、また別の地点に到達するだろう。そこで私は出発点の一例として、宗教学というものを手短に取り上げ紹介いたしまして、そういう出発点を私は取らない、取ることが出来ないのだ、という結論に話を向けてゆき、じゃあ、どうすればいいのかというふうに考えを展開してみたいのです。

## 宗教学の諸分野

宗教学と申しますのは、その名からして、宗教について一番多くのことを教えてくれるように思うわけですが、蓋を開けてみますと、そうでもありません。現代宗教学の諸分野ということで、沢山ある中から三つばかり挙げてみます。「比較宗教学」という分野では、マックス・ウェーバーという人がとくに先駆的な仕事をしました。ウェーバーの著作に『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』という、「プロ倫

と呼ばれている本があります。その中でプロテスタンティズムの倫理とカトリックの倫理を比較して、プロテスタンティズムの倫理がいかに資本主義の形成に役立ったかということをお話しているわけです。そういうふうに宗教同士を比較することによって、宗教の特徴を割り出すタイプの研究が比較宗教学です。それから「宗教心理学」というのは、レジュメに名前を挙げたような人達、たとえばフロイトという人が宗教というのも人間の性と申しますか、性欲と申しますか、その性欲に還元して説明しようとしたのに対して、ユングとかエリクソンという人達は、宗教はそれ固有の核を持っていて、何かに還元できるものではないんだと言ったのです。それから「宗教社会学」の方にもウェーバーとかデュルケームとかいう人達の名前が出てまいります。ご存知の分野だと思えますけれども、ようするに宗教集団というものがそれぞれにどういうタイプの共同体を作っていくか、どういうタイプの社会形成をしていくか、という研究であります。そこに宗教のそれぞれの個性を見ようとする。日本で言いますと、無教会主義はこういう集団を作るとか、あるいはプロテスタント教派はこういう共同体を作るとかいうふうなことを例に挙げる事が出来るかと思えます。

## 宗教学の生い立ち

こういう内容を抱えている宗教学を扱いますときに、宗教学の生い立ちを是非、考えておく必要があります。宗教学は19世紀にヨーロッパで成立した学問です。ですから非常に新しい学問ということが出来ます。これは民族宗教と世界宗教を区別するのはよくない。そういう区別というのはキリスト教中心の宗教観をもたらす。宗教をもっと、ある意味で平等に扱う、そういう発想から出発しています。この場合、民族宗教というのはたとえば、おばあさんがお地蔵さんにミカンを一つあげて、そばでしゃがんでじっとしているというような民間宗教なんかをお考えくださって結構です。それから世界宗教と申しますのはキリスト教

とか仏教とかイスラム教というような世界的な宗教です。

ところがこの宗教学は、人間の内面に最も深く触れてくる筈の宗教を自然学の方法に倣って説明しようとしたしまして、そのために実証主義と還元主義という二つの特徴を持つようになります。人間のナマの生きた姿を、——それは宗教という形で出てきますけれども——、それを自然科学に合併すると言うと少し言い過ぎかもしれませんが、自然科学の方法に引き付けるような方向で進みまして、そこから二つの特徴が出てくるというわけです。この二つの特徴まできちんと説明しておりますと時間がかかりますので、一つ宗教社会学からの例をあげまして、二つの特徴を捉えていただきたいと思います。

宗教社会学の例として、最近、神道の研究における宗教システムという考え方が提案されています。神道集団、いわゆる教派を捉えるのに、従来の考え方では教団とか教派を単位として考えるわけです。ですから金光教であるとか、大本教であるとか、あるいは天理教であるとか、神道系の新興宗教がありますけれども、そういうものを単位として考えますので、その場合、研究者は集団ごとの教理とか礼儀の在り方に主として着目してまいります。これが従来の研究方法です。それに対してまして宗教システムの考え方は、今申しました教理、儀礼の他に組織、制度や人材の面を加味しまして、この共同体（システム）は緩くつながりながら展開してゆく、という視点で神道各派の動き方を研究するというものです。ですから単に教理だけですと、この教派とこの教派はここで教え方が違うから対立しているなどという見方になりますけれども、人材というようなものを加えますと、この教派とこの教派は教えの面では対立しているけれど、人間関係が非常に上手くいっているから、ある日、合同することも出来るし協力関係に入ることも出来るんだ、という柔軟な捉え方が出来る。そこに、この宗教システムの良い点があるわけです。つまり宗教の社会文化的次元での動態、ダイナミズムにより接近できるということなのです。しかし、宗教とは何かという我々の本来

の課題に立ち戻って考えますと、その問題に正面向から取り組むというよりは宗教の集団形成という社会現象に置き換えて宗教を語っているわけです。つまり共同体の形成という社会現象に還元して宗教を語っているわけです。

## 宗教学と生きた宗教とのへだたり

そういうふうに見てまいりますと、どうも宗教社会学の知識には限界がある。宗教の実証的側面に視野を限定しておりますために実証科学なんです。実証的、客観的な科学ですから、たとえば共同体の形成というところに還元して説明する。そうしますときに、宗教的共同体の動き方とか歴史的展開はよく見えるかもしれませんが、人間の心の問題はどうなるのか、という点がどうしても残ってまいります。宗教学においては、かえって宗教の何たるかが隠れてしまう恐れがあると言わざるを得ないのです。私が学生時代にある先生からこう言われたことがあります。「君ね、宗教学というのは宗教でないものを研究する学問だよ」。まさに今の宗教社会学の考え方は、それ自体としては、宗教本来の心の問題はどうでもよくて、それがどういう共同体を形成していくかというところに宗教を語る場を求めていくというわけです。宗教でないものは何でも勉強するけど、宗教そのものはやらないのが宗教学であると悪口を言いたくなるのも、こういう面があるからなのでしょう。現代日本の宗教学者で山折哲雄さんという人がおられます。広く認められている人ですけれども、山折先生もこう言っておられます。「宗教学は宗教の機能や性格を歴史や言語、もしくは社会や真理の領域に還元し、その結果、宗教の宗教たる存在理由の究明をその研究対象から除外する傾向がないではなかった」。これは宗教学者の言でありますけれども、実証的な科学一般に言うことであります。大事な点なのでもう一つ例をあげてみますと、たとえば樹木の「桜」を実証的に研究しますと、そこには植物学の知識で語られる「桜」というものが出てきます。つまり桜の花や木や葉などの特徴を羅列して、こういう特徴を

備えているものは「桜」であるという植物学の知識が出てまいります。このような種類の本をご覧になりますと、桜の木の命ということには全く触れてこない。桜の木が生きてそこにある、という知識は植物学のどこにも語られません。ですから宗教学に限らず、一般に実証科学というものは生きてそこにある、その生きた実態というものを語らないという特徴があるのです。

そう言いましても実証的、客観的な知識が無意味だということではありません。宗教学の悪口ばかり言っているようですが、こう申す私自身、宗教学の学位を隠し持っております。そういう宗教学の成果を血の通ったものにするためには、宗教のよって立つ究極の根拠、すなわち他の何ものにも還元することの出来ない宗教固有の命と一体化してやらなければ、生きた知識にならないのではないか。宗教を考えるために宗教学を出発点にすることは、私には出来ないで最初に申しましたのは、こういう理由からであります。

## アポリア

血の通った知識、あるいは命の息づかいが聞こえてくるような言葉はどこで生まれるのか。こちらを考えていかなければならないと思うのですけれども、そういう方向で考えようと思つと、たちまち難関にぶつかることに気がつきます。今、宗教の命と宗教学の間をつないで一体のものとする場を構築するなど、大分偉そうなことを申しましたけれども、実は、言うは易く行なうは難しであります。そう簡単にはまいりません。宗教固有の核ということを行いましたけれども、それがおよそどんなものか考えてみればすぐお分かりになります。たとえば異常な宗教体験が宗教の中心をなす場合ということが考えられます。ある非常に特殊な体験です。教祖の女性がある日、エクスタシーのただ中で受けた靈感が、新しく宗教を創始する現象などというのは、これに当たります。

また通常の言語による説明を拒絶する奥義であるとか、ただ信じて受け入れる他ない教理が宗教の核心をなしていることも珍しくありません。キ

リスト教であれば、ただキリストが神の子であることを信じれば、あなたの未来には希望が湧きますとか。そういうことを言われましても、それは確かにキリスト教の核心かもしれないけれど、我々にとっては到底、近付き難い言葉でありましょう。ただ南無阿弥陀仏の六文字を唱えておればよろしいのだ。そうかもしれないけれど、いつの間にか南無阿弥陀仏も口から出てこなくなったりするのでありまして、要するに信仰のない者や部外者には全く分からない類の事柄と見えるのです。それは宗教固有の言語でしか語り得ない面を持っておりますし、我々の日常の言語や宗教学のような客観科学の言語とは相容れないものではないか。つまり実証的、客観的な宗教学の知識と宗教固有の命とは容易につながりそうもないわけです。このことが哲学の世界、たとえば解釈学でも大いに問題になってきます。あらゆる分野の学問で生じている、実証科学と生きた知識とをどうつなぐか、という問題であります。

ここで話が脱線しますが、国際学部がどうして政経学部にならずに、政治経済だけでなく人間というものを取り扱う人間科学と申しますか、人文科学と言ってもいいと思いますけれども、そういうものを木に竹をつなぐような形で設けているのかというのは、私の考えでは、こういう我々の生きた知識へのアプローチを狙ってのことだと思います。10年前に国際学部が発足しましたとき、ある著名な経済学者に、こういうふうにして政治と法律、経済と社会学、それから人文科学の三本柱を統合するような形で新しい学部を始めるので、是非、先生も来て欲しいと言いましたら、その経済学者はそんなことは絶対にあり得ないと言って、とうとう国際学部に来られませんでした。そのくらい国際学部というのは大それた希望を掲げているのだと思います。今日、武者小路先生という政治学者が宗教についてお話になるということも、国際学部でなければなかなか出来ないことです。アラン先生なら「あなた、勇気がありますねえ」と言うところだろうと思います。

## 宗教と芸術の類似

そういうふうに、なかなか一つにならないのですけれども、ここで私は、ある仮説を立ててみよう、一步を踏み出してみようということでアポリアの打開、アポリアからの脱出を試みたいと思っています。宗教とは何かを考えるために、宗教とよく似たものを何か一つ取り出してきまして、それとの関係の中で宗教を捉えようとする。これは私の発明でも何でもありません。ギリシャ哲学以来、パラダイムの方法と呼ばれているのは、この方法であります。最近、トーマス・クーンという人がパラダイムという用語を、大変間違った使い方をしましたために、日本でもパラダイムという言葉がプロ野球の解説にまで出てくるくらいポピュラーになりました。トーマス・クーン自身は反省して、このような言葉の使い方は間違っていたということを自分の論文で書きましたけれど。

そこで宗教と何かよく似たものとして芸術はどうか、ということを考えてみたいのです。

宗教と芸術は、しばしば一つに融合する性質があります。宗教音楽というのはその例です。キリスト教会で生まれましたグレゴリオ聖歌は宗教音楽の例でしょうし、また仏教のほうでは声明(しょうみょう)というようなものに今も人気があるようです。もちろん、宗教美術もそうでありまして、スペインのゴヤであるとか、あるいはフランスのシャガールとか、絵の中にキリストが隠されている。こういうものが非常に沢山あります。仏教のほうで仏像は我々に身近な例であります。それから、いちいち挙げるまでもありませんが宗教建築もそうです。こういうふうに融合しやすいというのは、どこかで似ているからだと思うのです。その似ている点を挙げてみますと、二つあります。第一は、この二つは共に崇高なものを見上げるという点です。つまり天上的なものを見上げるということです。宗教の場合ですと神を見上げるということでしょうし、芸術の場合ですと崇高な美を見上げるということになると思います。第二に、それと同時にこの二つは身体性とか物体性

を目指す、地上的なものをどこまでも追究するという性格があります。つまり芸術の場合ですと、仏像であるとか彫刻であるとか芸術作品という形で物体性、身体性を以て美を実現するという方向を持ってあります。宗教の場合ですと、礼拝とかミサというのは身体行為が多く含まれております。たとえばグレゴリオ聖歌を歌うとき、我々は声を出して、自分の身体の声で歌うわけですし、カトリック教会のミサには多くの仕草が入ってまいります。スタンドグラスもそういう意味で、視覚的な要素を持っています。

このような身体性ないし地上性の志向は、さらに別の面でも認められるようです。キリスト教ですと、神が人の姿をとって生まれる受肉という教えがあります。これはキリスト教にとって不可欠の要素であり、これを外してはヨーロッパの哲学史もなくなるのではないかと私は思いますね。そのくらい重要な要素です。それから仏教のほうでも似たようなことがあって、仏身ということ申します。日本に定着しました仏教の仏様と、神道の神々というのは非常に性格が異なりまして、神道の神々というのは大体目に見えない姿で森とか山に住んでおりますけれども、仏教の仏様というのは必ず身体を持っております。ですから仏像になって出てくるのです。阿弥陀仏という仏様は衆生救済で、我々の身近なところに来て我々を救ってくれる地上性と申しますか、そういうものを持っております。薬師仏もきちんと肉体の姿を持っております。人間の病気を治すという我々の身近なところで働く仏様です。

## 宗教の地上性

こういう身体性、地上性というものを宗教と芸術は共有しているのではないか。そこで、こういうふうに問いを立ててみました。我々は芸術における美を知ろうとすると、物的な姿形、つまり芸術作品を通して芸術的な美を垣間見ると思うのです。それを宗教に引き当てた場合、芸術作品に対応するものは何だろうか、ということなんです。宗教芸術を考慮外としまして、宗教儀式とい

うものありますけれども、それではまだ宗教固有の領域を出ておりませんので、もう少し宗教の地上性を追ってみたいのです。我々が宗教の外に立ちながら宗教の善さを眺めることの出来るような窓は、世界のどこに見出せるか。宗教に何らかの善さがあるとして、誰しもがそれを認めるであろうような場面が、どこかに現れていないだろうか。この地上で最も不幸な人々、悲惨の中に生きている人々、最も力の弱い人々と共に宗教が働いている場面を皆さんもご存知かと思えます。地球上に二千万人はいると言われる難民、それから殆どあらゆる都市で見かける浮浪者のことを考える人々は非常に少ない。まして自分の人生を賭けて彼らと共に生きようとする人は極めて少数と言わなければなりません。その極めて少数の一部に信仰ある人々がいる、ということをお我々は薄々知っている。こういうところに宗教の善さが、あるいは宗教の作品が見られないだろうか。

### 浮浪者（ホームレス）

私は自分の経験を含めまして浮浪者（ホームレス）を例にとって、宗教が地上に作品を生んでいる場面というのがどういふものかを少し皆さんに紹介したいと思えます。

ホームレスは——浮浪者とも呼ばれますが——米国だけで数百万人いると言います。そもそも、こういう人達は住所不定であり、統計自体が難しいと思えます。近頃では日本の大都市、中都市でも必ず見かけるようになってきました。私自身も自宅の近所に住む、近所に住むと申ししても公園の便所に住んでいる老夫婦と知り合いになって三年目になるんですけども、とにかく私の実感を申しますと、そういう人達と付き合っていて、その事態を改善しようと思っはいけない、ということが一つあります。たとえば始めのうちはあったかいラーメンを食べさせてやりたいとか、寒い冬は毛布を持って行ってやりたいかと思えます。しかし詳しくは言いませんが、そういうことは殆どの場合害になります。では何が必要なのかという彼らが生きる勇気を失わないように一緒

にいてあげる。だから、きりがありません。いくらやっても何も改善されないし、ただ彼らが勇気を失わないように話をしてやるだけ。しかし浮浪者たちにとっては自分が誰かとつながっているという思いが喜びになるのです。食料や毛布も最小限必要なことは必要ですが、こういうつながりを変質させる面があります。

私はキリスト教の活動しか知りませんが、そのごく一部を紹介申し上げますと、普通の人なら誰も寄り付かないようなところで、本当に少数の人々が働いております。たとえばキャールモンド（第四世界）という運動があります。これはむしろ武者小路先生の方がお詳しいのではないかと思いますけれども、グレジンスキー神父という人が創設いたしました活動です。その他にラルシュ共同体、これは訳せば箱船共同体ということになりますが、これもジャン・ヴァニエというカトリックの信徒が創設しました。それから私もちょっと知っております、横浜の寿町の障害者の作業所なども神父さんだった人が神父をやめてこの仕事をなさっております、今でも「神父サン、神父サン」と呼ばれております。こういうところに私は宗教を考えるための出発点があるのではないかと思うのです。なぜかという、そこには何か宗教固有の崇高な使命が感じられる。と同時にもっとも見捨てられたこの世の人々と共に働いている。

この人達を考えますときに、飢餓、貧困、病気というような決まりきったレッテルが出てまいります。こういう面は先ほどから申しております客観的、実証的な面なんです。食糧が何トン必要だ、薬品がこれだけ必要だ、所得はこれだけだ、と数量化できるような客観的実証的な知識で捉えられます。生きて行く上での必然的な条件という面も一方で認めなければなりません。そしてこういうところはある程度、行政的に対応できるのです。もちろん、十分とは言いませんが。

しかし、その場合にそこで不幸を生きている人々の心の問題はどうか。そこを考えるなら、その時、その場所で彼らが望んでいることを我々は知らなければならぬ。そんなことを行政

に期待しても殆ど不可能に近いです。実証的には捉えられない生の領域、生きた知識ということが必要なのです。彼らは安心して話が出来る相手を本当に求めております。口がききたいんですね。あったかいラーメンなんかじゃない。とくに日本のホームレスはそうです。もちろん、そういうことも時代が変われば変わっていくかもしれませんが、今の時代に浮浪者と話してみますと、それは切実に感じる点です。それから家族が欲しいということがあります。家族生活がしたいのです。私の知っております老夫婦のおばあさんも、よくこういう話をするんです。「あたしの妹がいてね、いい大学出た会社の部長さんと結婚してさ。あたしがたまに遊びに行くと食べきれないくらい御馳走してくれるんだよ」。このような話を20分も30分もするんです。それは全然、嘘です。でも、本当です。彼女は家族が欲しいということを行っているのです。そこで我々は人間の言葉を聞くときに解釈ということが必要なのだ、ということを知ります。また、その旦那のほうのおじいさんは「今日は俺さぁ、畑行ってね、里芋を植えてきたんだよ。来年の春になるとこのくらい芽が出るからな、お前にも食わせてやるよ」なんて言うんです。これも真っ赤な嘘です。駅の階段に腰掛けて拾ったタバコを吸って一日、過ごしてただけなんです。でも、この言葉はものすごく真実であります。畑仕事をしたい、自分は働きたいということを行っているのです。

## 宗教が宗教でなくなる地点

そういう場に宗教の働きを考える出発点があるのではないか、というのが私の見通しであります。それと共に、それがどういう場かということこれから研究していかなければならないと思っております。浮浪者達に向かってキリスト教の教理を語ったり、仏教の有り難い教を語るということは全く無意味です。そうだとするとしかし、そういうところで宗教が相互に協力できる場というものがあるし、また文化の違う人達もそういうところで協力し合えるのではないか。つまり宗教が宗教でなくなってゆくストレスの接点は、宗教が普遍主義に脱皮して行く場でもあるんじゃないか。宗教芸術が宗教固有の領域に留まらずに、普遍的な価値をもって人々の前に輝くことがあるように、宗教が自己の形態を脱皮して、普遍的な価値を輝かせる局面がある。そういうところを出発点にして、宗教を考えていったらどうだろうか。そこに我々が「宗教と普遍主義」というプロジェクトをやっている一つの意味がありはしないか、というようなことを今、考えております。

[付記 本稿は、「宗教の時代の国際学」をテーマとするシンポジウムの講演に加筆したものである。このシンポジウムは、国際学部付属研究所の共同研究プロジェクト「国際学の展望」「宗教と普遍主義」の共催により、1995年10月26日に行われた。]